

フリッツ・イエーデの青少年音楽学校構想

—シャルロッテンブルク青少年音楽学校におけるカリキュラムの検討—

小山 英恵

はじめに

本稿では、フリッツ・イエーデ (Fritz Jöde, 1887-1970) の構想により 1923 年に創設されたシャルロッテンブルク青少年音楽学校 (Jugendmusikschule Charlottenburg der staatlichen Akademie für Kirchen- und Schulmusik) におけるカリキュラムを取り上げる。

イエーデは、ハンブルクにおける民衆学校 (Volksschule) の教師であった。その職のかたわら、20 世紀初頭のドイツにおける新教育運動である改革教育運動 (reformpädagogische Bewegung) に参加する。この改革教育運動の契機の 1 つは、青少年運動 (Jugendbewegung) にある。青少年運動における音楽活動を源として発展した青少年音楽運動 (Jugendmusikbewegung) の指導者となったイエーデは¹、雑誌の編集等を通して自らの音楽教育論を主張する。このような活躍からイエーデは、1923 年にプロイセン文部省の音楽担当官であったケステンベルグ (L. Kestenbergl, 1882-1962) の助力によって、「ベルリン・シャルロッテンブルグ国立教会音楽・教育音楽アカデミー」の教授に任命される。教育方法論の教師としてこのアカデミーに招かれたイエーデは同時に、シャルロッテンブルク青少年音楽学校の創設監督を任せられることになる²。このようにして、シャルロッテンブルク青少年音楽学校は公立の学校でありながらも³、その理念はイエーデによる青少年音楽運動の意図もとで進められた。このこと背景には、当時のケステンベルグによる一連の学校音楽改革の方針、すなわち音楽教育は「内面的な生の形成 [であり]、個性の陶冶に本質的にかかわりあう」⁴とするという考えと、イエーデによる青少年音楽学校の理念との間に本質的な共通点があった⁵ことがあるといえよう。

このシャルロッテンブルク青少年音楽学校とは、午前中には義務教育機関である民衆学校に通う一般の子どもたちが、週数回の午後に音楽を学ぶことのできる学校である。この学校は、ドイツにおいてあらゆる子どもたちに開かれた初の公立音楽教育機関であった。その後青少年音楽学校は、ドイツ各地やオーストリアへと設置され、数を増やした。それらは 1944 年前後には戦禍のうちに閉鎖されるも、戦後には、1952 年に創設された「ドイツ音楽学校連盟」(Verband deutscher Musikschule) により定められたカリキュラムのもとで、子どもから成人までを対象とする音楽学校 (Musikschule) として再組織され、現在ではドイツ各地にその数が 900 を超えるまでに発展している⁶。このようにイエーデによる青少年音楽学校構想は、現在まで続くあらゆる人々のための音楽教育機関の嚆矢となった⁷。

シャルロッテンブルク青少年音楽学校のカリキュラムに関する主な先行研究のうち、まず挙

げられるのはツヴィッテンホフ (W. Twittenhoff, 1904-1969) の研究である⁸。ツヴィッテンホフは、青少年音楽学校一般について、その組織面から内容面に至るまで広く概観している。彼は、シャルロッテンブルク青少年音楽学校も含め青少年音楽学校における音楽授業が、唱歌教育のみであった当時の学校教育以上の質を提供するものであるとし、その特徴として、歌唱、器楽、身体の動きを含む総合的教育が行われること、および共同の学習を中心とすること等を挙げている。一方シュトゥンメ (W. Stumme, 1910-1994) は、ドイツにおける音楽学校史を詳述するなかで、イエーデによるシャルロッテンブルク青少年音楽学校構想を取り上げている⁹。シュトゥンメは、ケステンベルクが歌唱学校、器楽学校、そしてダルクローズ (É. J. Dalcroze, 1865-1950) の方法論を基礎とするリズム体操の民衆音楽学校の3つによって民衆音楽学校を構想したのに対し (この構想は実現しなかった)、イエーデがこの3つを発展的に統合させ、身体運動の教育を独立させるのではなく歌唱と器楽の教授に結びつけてこの学校を構想したことを明らかにしている。またイエーデの方法論が、当時の機械的な音楽教育の方法論に対して音楽の本質を成す「生彩に富む(lebendig)」動きの基礎をもたらすものであることを指摘している。その上でこの学校の基本となる授業が、「声楽音楽」、「器楽音楽」、「音楽を聴くこと」という3領域の「音楽行為」を目的とする「音楽教授」であることを紹介し、いかなる教育行為も鳴り響く音楽とともにあるという特徴を明らかにしている。

これらの先行研究は、シャルロッテンブルク青少年音楽学校 (以下、青少年音楽学校) における音楽授業の内容および方法論について明らかにしつつ、それが当時の学校音楽教育に対して新しいものであったことを指摘している。しかし、このような新しい音楽授業論を説く一方でイエーデは、青少年音楽学校の実際の意義を感じさせる、音楽授業よりも大切な教育的要素が他にあるとする¹⁰。その要素とは、図書室での活動や、子どもたちが自主的に音楽する個々のグループ活動、また学校行事としての遠足等といった授業外の活動である。したがって、青少年音楽学校において子どもたちが体験するカリキュラムとは何かということを考えるとき、それは先行研究において焦点化されてきた音楽授業の側面のみで語れるものではなく、授業外における活動までを含みこんで初めてその全体像を明示することが可能となろう。しかしながら、青少年音楽学校におけるカリキュラムについて授業外の活動を含めて検討された研究は、管見の限り見当たらない。

イエーデ自身は、自らの構想においてカリキュラムという言葉は使用していない。しかしながら、音楽授業と授業外の活動を含めた全体構想を明確に立てていることから、それらカリキュラムとして本稿の検討の対象とする。なお本稿では、イエーデが記録を残している創設から1929年までのカリキュラムに焦点をあてる。ただし、イエーデの青少年音楽学校についての資料は非常に限られているため、この時期のカリキュラムの詳細を時系列的に追うのは難しい。したがって本稿では、この間のカリキュラムにおける全体的な特徴を浮き彫りにすることを目指す¹¹。

1. 青少年音楽学校の理念、組織構想、対象

1. 1 理念

イエーデによる学校創設の意図は、子どもたちに音楽教育をほどこそうとする考えのみにあ

ったのではない。イエーデが問題視していたのは、音楽専門家から一般の人までのあらゆる人々の音楽生活の状況であった。たとえば音楽専門家は、経済的な理由や因習から仕事として音楽に関わることが多い。そのため、その音楽には「内面的な共同の響き」¹²がないとイエーデは批判する。また音楽企業は、コンサートやオペラ公演の慌ただしさに追われ、経済的競争の渦中にある。一方で一般の人々については、受動的な音楽活動に留まるか、あるいは音楽自体が生活に欠けており、多くの国民はほとんど歌うことさえできないと、イエーデは批判する¹³。

しかし、こういった状況下にあっても、「人間の根源的衝動は、その生 (Leben) の喜びを歌の中に放ち、音楽を求めずにはいられない」¹⁴とイエーデは述べる。この音楽を求める動きは、20世紀を迎えた直後にワンダーフォーク (Wandervogel) を起源とする青少年運動において、未だ職業的、経済的なしがない青少年から生まれ始めたという。競争やそれによる人々の分裂がはびこりつつある社会のなかで「生の困窮」¹⁵を抱えた彼らは、「共同 (Gemeinsamkeit)」を基盤として、歌、とりわけ国民に共通の基盤となる民謡を歌う。その活動にイエーデは、「共同」の精神や「生彩に富む」¹⁶内面を表す「生」の表現をみる¹⁷。イエーデは青少年の活動について、その歌において「真の生」がよみがえり、歌が「生」を呼び寄せるのかあるいは「生」が歌を呼び寄せるのかは区別できない、と述べている¹⁸。つまりイエーデにとって音楽は、人々が結びつく最高の形での「生」であり、本来の自己の「生」を生きることの表現であったのである。イエーデが求めたのはこのように、すべての人々が階層や分裂を越えた「共同」の精神を基盤として、能動的に歌い音楽することであった。言い換えればイエーデが求めていたものは、音楽と、それを営む人間の内面とが分かち難く結びついた音楽活動の質であったといえる。

このような考えからイエーデは、「すべての階層の国民における音楽への能動的な参加の再興」¹⁹を目的とする音楽教育を実行する必要性を説き、青少年音楽学校を構想する。まさしくここに青少年音楽学校の理念をみることができる。すなわち、すべての階層の人々における音楽活動の再興を目指すこと、そしてその音楽活動の質は人々が互い能動的に音楽をし、互いに結びつくことで、本来の「生」を実現するものでなければならないことである。

1. 2 組織構想

イエーデは、従来の学校の枠組においては、このようなすべての人々における音楽活動の再興を促す新しい音楽教育を実行することが難しいと考えた。そこで、彼は新たな音楽教育の場として音楽大学附属の青少年音楽学校を提唱する。その主な理由として、イエーデは以下の点を挙げている²⁰。まず音楽大学は、未来の音楽家を育成する場であるため、その育成に直接的な影響力を有している。したがって青少年音楽学校が音楽大学に附設されることによって、青少年音楽学校における音楽活動の理念や質を未来の音楽家育成において伝えることが可能となる。また音楽大学は、未来の学校における音楽教師養成も担っている。イエーデは、音楽大学の学生を青少年音楽学校での指導実践に参加させることにより、青少年音楽学校が教師教育のための訓練学校を兼ねることも意図する²¹。教師教育を担う音楽大学附属の青少年音楽学校は、未来の学校音楽教育へも影響を及ぼすことができると考えられていた。イエーデは音楽大学附属の青少年音楽学校を創設することによって、彼の求めた音楽活動の質、すなわち、「共同」の精神や「生彩に富む」内面の「生」の表現としての音楽活動を、未来の音楽専門家や音楽教師に広めようとしたのである。このような考えのもとに、青少年音楽学校は、音楽専門家、音楽

教師を養成する役割を担う音楽大学、「ベルリン・シャルロッテンブルク国立教会音楽・教育音楽アカデミー」附属の学校として創設されることになる。

1. 3 対象

また、青少年音楽学校ではすべての階層や家系の子どもたち、とりわけ経済的な事情から良い音楽の授業を受けることのできない状況にある音楽的才能のある子どもたちを生徒とする方針をとった²²。音楽的に才能のある子が、経済的な理由から青少年音楽学校で学ぶことを断念することは特にあってはならないとされた。そのため、授業料は無料とされた。それだけでなく、入学を許可された子どもたちには若干ではあるが、通学のための交通費が支払われる方針が定められた²³。音楽的に才能のある子どもたちを生徒とするという方針は、才能の乏しい子どもたちを締め出すという考えに基づくものではなく、才能のある子どもたちが青少年音楽学校で教育を受けるためのいわば代表選手となり、その音楽活動の影響を午前中の民衆学校において直接他の子どもたちに及ぼす、という考えに基づくものであった。この方針にしたがい、開校にあたって、歌やメロディの模倣を主な課題とする入学試験が行われた。あらゆる階層の子どもたちを対象とするために、開校時の生徒の募集は、市の教育部からの要請によりシャルロッテンブルクの公立学校の教師たちを通して行われた²⁴。初年度は、入学試験に申し込んだ9-14歳までの123人の子どものうち45人の入学が許可された。また翌年の秋には、6-8歳の69人の子どもが入学試験に申込み、新たに23人が入学することになる²⁵。このようにしてイエーデは、あらゆる階層の子どもたちに音楽教育の門戸を開いたのである。

以上のようにイエーデは、すべての階層の人々における音楽活動の再興を目指すことを目的とし、その音楽の質としては「共同」の精神、そして「生彩に富む」内面の「生」の表現としての音楽を求めた。その実現のために、あらゆる階層の子どもたちを対象として、音楽大学附属の青少年音楽学校を構想したのである。単に音楽能力を身につけさせようとしたのではなく、階級を超えた人々の結びつきや「生」という人間の内面的育成と結びついた音楽活動の質を、音楽専門家を含めたあらゆる人々に求める点に、この理念の特徴を見出すことができる。

2. 音楽授業のカリキュラム方針

2. 1 3領域2種の授業

イエーデは、青少年音楽学校における「音楽行為 (Musikausübung)」の領域が、a) 合唱、交唱、独唱を含む「声楽音楽」、b) 大小のグループにおいて多様な楽器で合奏する「器楽音楽」、そして c) 音楽作品の実演と紹介を行う「音楽を聴くこと」の3つにあるとする。この「音楽行為」を実際の目的として、授業において「音楽教授 (Musikunterweisung)」が行われる²⁶。「音楽教授」の目的となる「音楽行為」の領域が、音楽学や音楽史といった音楽についての知識分野ではなく、あくまで歌うこと、演奏すること、聴くことという「音楽する (Musizieren)」ことにある点を押さえておきたい。

「音楽教授」は、「音楽行為」における上述の3区分と直接対応する3つに区分される。すなわち、a') 発声、独唱、合唱の教育が行われる「声楽授業」、b') 弦楽器、フルート、リュート、ピアノ等の「器楽授業」、c') メロディ、和声、および楽式論の基礎である「活動的に音楽を聴くことの授業 (Unterricht in tätigem Musikhören)」である。ただし、このような3

つの区分が明示されながらも、実際の授業はこの3つに分けて行われるわけではない。まず「声楽の授業」および「活動的に音楽を聴くことの授業」は、「総合的な音楽授業 (Gesamtmusikunterricht)」として提供される。この「総合的な音楽授業」はすべての子どもが受講するクラス授業であり、週1度、午後2時間ほど行われる²⁷。初年度は低学年クラスと高学年クラスで行われ、翌年からは低学年、中学年、高学年の3つのクラスに再編成された。ただし、入学試験において示された子どもたちの音楽的能力や歌の技能は、期待をはるかに下回るものであり、子どもたちは、「たたき込まれた数少ない歌」のみを、不完全な音感と考え得る限りの無作法な声で歌った。彼らには学校における「長年の歌の授業にもかかわらず、まさにメロディやリズムの点だけでなく、音の聴取教育においてもひどい欠乏が示された」²⁸のであった。そのため、初年度は、低学年クラスも高学年クラスも、同じように初歩からの教育が行われた。ただし、教材は年齢によってふさわしいものにかえられた。授業では常に、教員養成のために、アカデミーの学生が指導の補佐を務める。授業は、①教員による一斉授業、②アカデミーの学生によるグループ授業、③教員による一斉授業という流れで行うとされた。

一方、「器楽授業」は「総合的な音楽授業」において、十分な音楽の基礎能力を身につけた者、少なくとも1年以上の「声楽授業」と「音楽を聴くことの授業」を受けた者が受講するものとされる。つまり「器楽授業」は「総合的な音楽授業」の発展的な授業と位置付けられる。ただし、器楽を学んだ子どもは、常に「総合的な音楽授業」においても器楽演奏を行う役割を担うことになる。そのため、器楽もまた「総合的な音楽授業」において取り上げられる領域といえる。器楽授業を受講した子どもの数は初年度には全生徒45人中7人であったが、3年目には全生徒89人中24人が受講していた。器楽授業で扱われる楽器の数や種類は、学校の経済状況の変化や外部からの楽器の寄附等によって増えていった。

このように、青少年音楽学校においては声楽、器楽、聴くことの3つの「音楽行為」の領域を含む「総合的な音楽授業」と、「器楽授業」の2種類の授業が行われる。(表1参照)²⁹。

表1 音楽授業の領域および授業の種類 (イエーデ執筆の資料をもとに筆者作成)

		「音楽行為」(目的)	「音楽教授」	授業
領域	声楽	合唱、交唱、独唱	発声、独唱、合唱の教育	・「総合的な音楽授業」 *すべての生徒が受講
	音楽を聴くこと	音楽作品の実演と紹介	メロディ、和声、楽式論の基礎	
	器楽	様々な規模や楽器編成による器楽合奏	弦楽器、フルート、リユート、ピアノ等	・「器楽授業」 *音楽の基礎能力を身につけた子どものみ受講

2.2 「総合的な音楽授業」の内容

次に、「総合的な音楽授業」についてより詳しくみていこう³⁰。この授業はすべての子どもたちが受講する授業であり、また「器楽授業」もこの授業と同様の方針をとるとされている。そのため、この「総合的な音楽授業」に焦点を当てることで、青少年音楽学校の音楽授業の特徴を明らかにできると考えられる。

「総合的な音楽授業」では、表1に示したように、発声、独唱、合唱の教育およびメロディ、和声、楽式論それぞれの基礎が教授される。しかし実際の授業は、ここに列挙された内容を順に学んでいくというものではない。まず、イエーデは「音楽の基礎原理は単に技能を伝えると

いうものではない。すべての出来事が、その発生の中で理解される。……それゆえ授業は完全に活動の授業でなければならない³¹と述べる。つまりこの授業は、いかなる内容も、実際に「音楽する」なかで学習されるものであるといえる。

内容としては、ソルミゼーション³²、記譜法やリズムといった、「音楽する」上で必要不可欠な音楽の基礎の学習がある³³。注目すべきは、基礎指導において常に、「生彩に富むもの (Lebendige)」³⁴が求められる点である。このことに関わって、メロディの動きを内面で感じることも基礎教授に含まれる。したがって、これらの基礎は当時一般的であった音楽教育のように理論的に学習されるのではなく、「実践的な活動において音楽の基礎を体験させる」³⁵方針がとられる。つまり、常に子どもたちが即興する、歌うといった「音楽する」なかで基礎指導が行われ、そのなかに上記の発声、独唱、合唱、そして和声やメロディの基礎が含まれるのである。また、「音楽する」ことのなかで指導される一方で、これらは、ハンドサインを用い和声を基盤として一音から指導されるソルミゼーション指導や、身体の動きを伴ったリズムの段階的指導といったように、音楽の専門的内容に基づいて系統的に進められる³⁶。

楽式論の指導も、「生彩に富んで音楽する」³⁷なかで行われる。たとえばカノンの学習の最後には、子どもたちが自作のカノンを歌い、演奏し、ダンスする催しが開かれる。そこで子どもたちは多声でカノンを歌い、ヴァイオリンやリュートの演奏をつける³⁸、といった具合である。

教材としての音楽作品は、まず、子どもたちの内面を生彩に富ませ、かつ音楽の基礎を含むとされる民謡である。民謡からスタートし、「人間をより高い関係」³⁹に置く芸術音楽が目指される。具体的には、ドイツ民謡からバッハ (J. S. Bach, 1685-1750) 等の芸術音楽までが収められているイエーデ編集の歌曲集『ムジカント』⁴⁰等に掲載されたものが扱われた⁴¹。

以上のように「総合的な音楽授業」では、発声、独唱、合唱、メロディ、和声、楽式論の基礎が、歌ったり、即興したりというように「音楽する」なかで、ときにダンスを含みながら体験的に教授される。このような有機的な方法をとることが、複数領域内容の授業を「総合的な音楽授業」として位置付ける理由であると考えてよいだろう。また「生彩に富んで音楽する」活動を重視しながらも、専門的知識に基づいた内容の系統的な教授が行われることがわかる。

2. 3 「真の歌 (wirkliche Lieder)」への道

ところで、授業においてイエーデが強調していることがもう一つある。それは、「子どもたちと大人との間に橋をかける」⁴²ことを授業における教師の課題とすることである。この課題を達成できたなら、子どもと大人とは互いに喜びのうちに接し、助け合い、伝え合うことができるという。互いに喜びのうちに接するなら、そこには「真の歌への道、すなわち歌の授業における共同体への道が現れる」⁴³とされる。またイエーデは、授業において本質的なものは、呼吸や発声練習、即興や歌、器楽、ダンス自体ではなく、それらの「出来事全体がどの程度内面に突き進んでいるか、……どの程度集まりの形成へと導いているか」⁴⁴であるとする。

これらの言葉から、イエーデが、授業において教師と子どもたちが互いに心を開き内面的なつながりをもつことを求めていることがわかる。そして、それこそが「真の歌」であるとされる。まさに、教師や子どもという授業の参加者が、心を開き合い喜びのうちに歌うことによって互いに結びつくことが、授業において音楽そのものと分かちがたく求められるといえよう。

以上から、青少年音楽学校のカリキュラムにおける音楽授業の特徴を次の4点にまとめるこ

とができる。第一に、目指される「音楽行為」の領域は、歌うこと、演奏すること、聴くことという実際に「音楽する」ことに位置づけられている。そこでは、子どもたちが音楽についての知識を習得するのではなく、あくまで「生彩に富む」内面に結びつく活動である「音楽する」ことを身につけることが目指されているといえよう。第二に、声楽、器楽、音楽を聴くという3つの領域が有機的に取り扱われる「総合的な音楽授業」が中心となっている。この点は唱歌教育のみであった当時の学校音楽教育に対して斬新なものである。第三に、「総合的な音楽授業」では、専門的知見に基づいたすべての教育内容が「生彩に富んで音楽する」なかで体験的にかつ系統的に教授される。活動中心の授業は新教育運動（改革教育運動）の特徴とされるが、イエーデの授業においてはその流れを汲みながらも系統的な授業が意図されている。第四に、授業の参加者が共に喜びのうちに接し合い共に歌うことがその質として求められるため、前章で明らかにしたような「共同」の精神が音楽と分ちがたく結びついて要求されている。この点は、イエーデの理念が単に音楽的能力を育成することにあるのではなく、「共同」の精神といった人間の内的育成と結びついた音楽教育を目指すことにある点に基因しているといえよう。

3. 授業外の活動 —— もうひとつのカリキュラム

次に授業外の活動について検討していこう。授業外の活動は大きく、図書室に関わるもの、子どもたちの自主的な活動、そして指導者が引率する学校行事の3つに分けることができる。これらの活動の意義は、「人間的な結びつきにおいて気高く、精練された歌のもとにある」⁴⁵とされる。ここに、授業外の活動においても人間の内的なものや結びついた音楽の質が求められていることが明らかである。ここでは、3つの活動を順にみていこう。

3. 1 図書室

青少年音楽学校には、小さな図書室が完備されていた⁴⁶。蔵書には、音楽や音楽家について多くの本、作品への入門書、音楽史に関する本、そして楽譜等がある。これらの蔵書は、授業のためにも使われるが、特に楽譜等は子どもたちによる自主的なグループ活動における音楽活動の重要な支えとなるものとされる。

これらの蔵書に加えて、この図書室は童話や伝説集、民話集、絵画集や画家についての入門書なども備えている。イエーデは、この図書室の蔵書が音楽関係の本のみでは十分でないことを強調する。それは、歌と並行して「いたるところの美しいものの世界」⁴⁷を子どもたちに開くためである。また、童話や伝説を知らなければ、童謡を「生彩に富んで」歌うことは難しいからでもある。このように青少年音楽学校における図書室は、子どもたちの自主的な音楽活動を支えるとともに、「音楽する」子どもたちの内面を深め、耕す役割を果たしているといえよう。

またこれらの図書の貸し出しは、多くの場合事務的には行われぬ。もちろん、年齢が上の子どもたちは、図書目録を利用しいわば事務的に本を借りていく。しかし、より小さな子どもたちは図書室を訪れると、管理者に、「何か素敵な本を貸してちょうだい！」とせがむ。子どもたちをよく知っている管理者は、その子をじっと見て、その子にふさわしいものを与え、加えて作品の特徴をいくつか示すことによってその作品へと導く。このように青少年音楽学校の図書室の営みは単に事務的な機能を果たすだけでなく、管理者による教育的指導を含むものであるといえる。

3. 2 自主的な活動

イエーデは、青少年音楽学校が単に子どもたちにより美しい音楽を育成する場というだけでなく、子どもたちが自己の「生」を表現できる青少年の「生の場 (Lebensstätte)」であるとし、そのために、「青少年たちのもっとも自由な企画としての活動の余地を与える」と述べる⁴⁸。このような活動の場として、子どもたちのグループ活動がある。

①「歌のサークル (Singkreis)」

もっとも代表的なグループ活動は、「歌のサークル」である。このサークルは、高学年の子どもたちによって運営されるものであり、1925年以降に設置されたものである⁴⁹。このサークルでは、子どもたち自らが選んだ数人のリーダーのもとで、週に1度、合唱とオーケストラの練習が行われることになっている。この「歌のサークル」において使用される曲集として、イエーデは音楽授業で扱われる『ムジカント』に加えて、『カノン』⁵⁰やヒンデミット (P. Hindemith, 1895-1963) の作品集等⁵¹を挙げている⁵²。また彼らはこの練習の集まりに加えて、「隠れ家の夕べ (Nestabend)」のためにも週に1度集まる⁵³。「隠れ家の夕べ」では、楽器を演奏し、民謡を歌い、語り合い、物語を読み、民族舞踏を踊り、また学校における様々な企画の相談をする。さらに彼等は、ベルリンの合唱の催しや、青少年による社交的な音楽の催しにも参加する。このようにして「歌のサークル」は、徐々に町の生活との深い関わりを持つものとなっていく。イエーデは、このような子どもたちにおける「音楽から出発した美しい人間的な結合への道を見付けようとする主体的な意志」⁵⁴が教師にとっての真の幸福であると述べている。

②民族舞踏のグループ

民族舞踏のグループもまた、年齢が上の子どもたちによって管理されている⁵⁵。民族舞踏のグループでは、個々のクラスにおいて選ばれた代表者が、舞踏を学ぶ。代表者らは、クラスにおいて皆に舞踏を伝え、共に練習する。このような方法で、舞踏は、徐々に青少年音楽学校の子どもの共有財産となる。すると、子どもたちには踊ることへの欲求が生まれる。踊っている子どもたちから、大人が舞踏を学ぶこともある。そのようにして青少年音楽学校の庭園では、たとえば大きな菩提樹の下で、器楽演奏とともに、子どもたちだけでなく、教師やアカデミーの学生が踊る姿が見られる。イエーデはこういった光景が「友愛的で美しい」ものであり、「演奏したり踊ったりすること以上の意義をもつ」⁵⁶とする。

このように青少年音楽学校の子どもたちは、グループ活動において、日常生活のなかで主体的にかつ共に音楽し、また舞踏する活動を展開する。そして、イエーデは子どもたちが共につながり、主体的に活動することを何よりも求めていたといえよう。

3. 3 学校行事における活動

①歌の旅

青少年音楽学校では、休暇の間も音楽活動が中断されることはない。休暇には、田舎へ行き、歌いながら共にハイキングをする。それが歌の旅である⁵⁷。あるときは湖畔へと旅行に行く。そこで、ハイキングや水浴をしながら、皆で音楽し、ダンスをする。またあるときは農園に滞在する。昼間はそこで仕事を手伝い、朝晩にはホストの中で歌い演奏するのである。子どもたちは、このような旅行から一つの記録を作成する。それは旅行の思い出のスライドに混じって旅行中に作曲された小さな遊び歌や、カノン、楽曲の楽譜が貼られているものである。

②「森の音楽 (Waldmusik)」

日曜の休みには、音楽をするために森へと足を伸ばすことがある。それは「森の音楽」と呼ばれるものである⁵⁸。そこでは子どもたちだけではなく、保護者や学校の教員らも集まって、互いに歌い、演奏し合う。そして最後は、全員による愉快的な民族舞踏で終わる。その参加者たちは、ときに色とりどりの花のなかで横になる。あるときは就学前の子どもたち、中学年の子どもたち、サークルの子どもたち、そして保護者と教師たちの四つの輪になってポロネーズやコラールを歌いながら城跡のような場所を登って行く。イエーデはこのような光景について、「一緒にいることがすでに十分な音楽であった。一緒にいることを感じ、それを喜んでいた」⁵⁹と記している。このイエーデの言葉から、彼にとっての「音楽する」ことが、人間どうしがともに交わり活動することと不可分のものであったことがわかる。

③「開かれた歌唱 (Offnes Singen)」

「開かれた歌唱」とは、保護者も招かれて行われる、共に歌を学ぶ機会である⁶⁰。この「開かれた歌唱」では、ひどい声や悪い音程で歌う者も誰一人除外されることはない。歌う気持ちを持つ者なら誰でも、参加できる。イエーデはこの「開かれた歌唱」の様子を次のように書いている。「最初は多くの父親や母親の顔の表情が日常の心配と苦勞で硬くなり冷たくなっていたのに、このような歌の時間の経過において、ホール中に笑顔が行き渡り、互いに喜びあう」⁶¹。つまりイエーデは、「開かれた歌唱」を、まさに人々が共に歌うことによって「生彩に富む」内面の「生」を実現させる機会として捉えていたといえよう。保護者にもこのような影響を与える「開かれた歌唱」は、学校自体に良い影響を及ぼすに違いないとイエーデは考えていた。

以上のように、授業外の活動とは、日常生活の様々な場面において子どもたちが自主的かつ共に「音楽する」ことであり、そのことによって、ときには保護者や教員を含めたすべての参加者が人間的な結びつきを体験するものといえる。また、子どもたちの自主的な活動を支え、その内面を深める役割の一部を図書室が担っている。このような授業外の活動には、次の2つの意味を見出すことができよう。1つは、前々章で明らかにしたような求められる音楽活動の質、すなわち音楽によって「共同」の精神や「生彩に富む」内面の表れである「生」を実現することを実際に体験することである。もう1つは、「音楽する」ことを通した集団活動によって人間的な結びつきが育成されることである。このように青少年音楽学校におけるカリキュラムは、音楽授業において単に音楽を学ぶだけではなく、そこで音楽的な能力を身につけた上で、それを活かして生活のなかで主体的にそして共に音楽をする体験と、そのことによって人間的な結びつきを育むことまでを含んでいるといえよう。

おわりに

以上に検討してきたように、青少年音楽学校は、「共同」の精神や「生彩に富む」の内面の「生」の表れとしての能動的な音楽活動をすべての人々に可能にさせることを目指すものであった。このような理念を実現するために、イエーデは音楽大学附属の学校を構想し、あらゆる社会的階層の子どもたちを生徒として呼び集めた。そのカリキュラムは、専門的知見に基づいた種々の内容が、有機的、総合的な方法において、常に人間間のつながりを重視した「生彩に富む音楽活動」のなかで系統的に教授される音楽授業と、学校内外の日常生活のあらゆる場面におい

て、自主的かつ共同の音楽活動を行う授業外の活動からなっていた。

以上から、次の2点を青少年音楽学校のカリキュラムの特徴として総括したい。1点目は、音楽授業の内容である。音楽授業は、当時の通常の学校音楽に見られたような唱歌教育のみにおける理論的教授による教育とは対照的に、「音楽する」ことを目的として、人間的なつながりのもとで「生彩に富んで音楽する」中で複数領域が有機的に扱われるものであった。ただし、その一方で音楽の基礎が系統的に教授されるという側面ももっていた。このような両側面が授業において統合されている点にイエーデ独自の音楽授業構想をみることができよう。2点目は、このような音楽授業だけでなく、そこで培われた能力を活かして生活の場において共に音楽をすることによって人間的な結びつきを育むという授業外の活動までを、そのカリキュラムに含みこんだ点である。この点は、文化内容に基づいて構成される教科カリキュラムと自主的な集団活動を中心として人間形成を図ろうとする教科外カリキュラムとの統合にたとえることができよう。単なる音楽的能力の育成ではなく、「共同」や「生」といった言葉で表されるような音楽と結びついた人間の内的育成を目指したからこそ、イエーデは音楽教育において、教科カリキュラムと教科外カリキュラムを統合したと考えられる。ただし、教科外カリキュラムといっても、授業外の活動は常に「音楽する」ことを通したものであったことを押さえておきたい。

青少年音楽学校に通い始めた子どもたちは、開校1年後の記念式典において、数多くの民謡、歌の単旋律とヴァイオリンの二重奏の曲等を含むモーツァルト (W. A. Mozart, 1756-1791) やバッハ作曲のメヌエット、ガボット等を歌い、演奏した⁶²。このプログラムからは、入学時には音感も乏しかった子どもたちが、少なくとも即興や器楽演奏を含め、公開演奏会の舞台にたてるまでの音楽的な能力を身につけたことは窺える。また開校2年目頃になると、子どもたちは自主的により多くの歌の練習を望むようになり、授業がなくても学校に来る姿も見受けられるようになっていた⁶³。このような子どもたちの姿からは、彼らが共に音楽する楽しさを見出していったことが窺えよう。このように、子どもたちが積極的に音楽を営み楽しむ力を身につけたという成果を生み出したと考えられる点において、このカリキュラムは高く評価できる。

一方で、「生彩に富んで音楽する」ことや、日常生活において人々の結びつきとともに「音楽する」ことを重視するなかで、音楽の専門的能力を育成することがどの程度意図され、あるいは到達されたのかについてイエーデは言及していない。この点において青少年音楽学校のカリキュラムは、音楽的能力の育成と人間形成とはいかなるカリキュラムにおいて両立可能となるのかという課題を示唆的に残すものといえよう。

今後、このような新しい音楽教育のためにイエーデが提唱した教員養成プログラムについて明らかにし、青少年音楽学校における教育についての理解を深めることを課題としたい。

¹ 青少年音楽運動は、第三帝国時代にナチスの青少年団の組織下に組み込まれたこともあり、1950年代にアドルノ (Th. W. Adorno, 1903-1969) によって激しい批判を受ける。この批判の詳細については、小山英恵「青少年音楽運動における F. イェーデの音楽教育論——Th. W. アドルノによる批判の検討をとおして——」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第58号、2012年、pp. 425-437を参照されたい。

² さらにイエーデは、青少年音楽学校と同じ主旨やカリキュラム原理のもとで、あらゆる年齢、性別、職業の人々を対象とするハンブルクの民衆音楽学校 (Volksmusikschule) の創設にもかかわった。

³ したがって、この青少年音楽学校における方針の発案はイエーデによるが、その創設に関わるすべては、学問・芸術・民衆教育省と、「教会音楽・教育音楽のためのアカデミー」、そしてイエーデの間で決定され、

小山：フリッツ・イエーデの青少年音楽学校構想

この学校をプロイセンにおけるその後の類似する学校設立の際の指標とすることが意図された。

⁴ Reform des Musikunterrichts in den höheren Lehranstalten, Ministerialerlass vom 14. April 1924.

⁵ 両者の理念の共通点は多くの研究によって指摘されている (G. Holtmeyer, Fritz Jödes musikpädagogische Intentionen und die Kestenberg-Reform, Übereinstimmungen und Abgrenzung, in : H. Krützfeld-Junker (Hg.) *Fritz Jöde, ein Beitrag zur Geschichte der Musikpädagogik des 20. Jahrhunderts*. Altenmedingen: Hilgard-Junker-Verlag, 1996, S. 98.)

⁶ 2012年1月現在。「ドイツ音楽学校連盟」のホームページ

(<http://www.musikschulen.de/musikschulen/fakten/traeger-der-musikschulen/index.html>) より、2012年11月28日確認。この連盟の創設にあたっては、イエーデもまたその筆頭メンバーであった。

⁷ ヴェッヒャーは「可能な限り多くの人々を音楽へと導くこと、またその人々に生彩に富んだ音楽の取り扱いを可能にさせること」において現在の音楽学校にイエーデの考えが生きていることを指摘している。

(D. Wucher, Anmerkungen zur Entwicklung und zum aktuellen Stand der Musikschularbeit in der Bundesrepublik Deutschland. in : K. H. Reinfandt (Hg.), *Die Jugendmusikbewegung, Impulse und Wirkungen*. Wolfenbüttel und Zürich : Möselers. 1987.)

⁸ W. Twittenhoff, Die Jugendmusikschule. in: H. Fischer, *Handbuch der Musikerziehung*. Berlin: Rembrandt, 1954. ツヴィッテンホフは第二次世界大戦後青少年音楽学校の再建に携わった人物である。

⁹ W. Stumme, Die Musikschule im 20. Jahrhundert Bericht eines Zeitzeugen. in : K. H. Reinfandt (Hg.) 1987. シェトウンメは1930年代以降この学校の中心的な教授陣となった。またシェットの研究もこの学校に触れている (R. T. Schütte, *Fritz Jöde Wirken in der Jugendmusikbewegung, Menschenbild und Bestrebungen zur außerschulischen Musikvermittlung*. Saarbrücken: Dr. Müller, 2008.)。

¹⁰ F. Jöde, Erster zusammenfassender Bericht über die Jugendmusikschule der Akademie für Kirchen- und Schulmusik für die Zeit von Mai 1923- März 1926. in: F. Jöde (Hg.), *Musikdienst am Volk, ein Querschnitt in Dokumenten*. Wolfenbüttel/Berlin: Gerorg Kallmeyer, 1927a. S. 66.

¹¹ イェーデがこの学校において活動したのは、政治的な理由によってアカデミーの職を解雇される1935年までであった。学校に関する資料は主に、①F. Jöde, *Musikschulen für Jugend und Volk, ein Gebot der Stunde*. Wolfenbüttel: Julius Zwisslers, 1924, ②F. Jöde, 1927a, ③F. Jöde, *Die Jugendmusikschule Charlottenburg, Der staatlichen Akademie für Kirchen- und Schulmusik, Eine Einführung*, Wolfenbüttel-Berlin: George Kallmeyer, 1929.とする。これらの資料は出版年が異なる。しかしイェーデは、主に学校の光景が記されている③の資料において、組織等については①および②を参照せよと明記しているため、1929年時点において①②において記された方針に変更がないと捉えられる。

¹² F. Jöde, 1924, S. 15.

¹³ a. a. O., S. 21.

¹⁴ a. a. O., S. 22.

¹⁵ F. Jöde, *Vom Wesen und Werden der Jugendmusik*. Mainz: B. Schott's Schöne, 1954, S. 9.

¹⁶ a. a. O., S. 13.

¹⁷ イェーデにおける「共同」の精神や「生彩に富む」内面を表す「生」については、小山英恵「フリッツ・イエーデの音楽教育理念——内面的育成とその実現のための音楽教育との関係に焦点をあてて——」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第57号、2011年、pp. 449-462に詳しい。

¹⁸ F. Jöde, 1954, S. 10.

¹⁹ F. Jöde, 1924, S. 32.

²⁰ a. a. O., S. 37-39.

²¹ 教員養成は青少年音楽学校の重要な課題に位置付けられている (F. Jöde, 1929, S. 5)。

²² F. Jöde, 1927a. S. 53.

²³ a. a. O., S. 57-58.

²⁴ a. a. O., S. 56.

²⁵ その2年後(1926年)には全生徒が89名となった。

²⁶ 「音楽教授」と「音楽行為」については、F. Jöde, 1924, S. 42-43.

²⁷ この授業は「歌唱の授業 (Sing Stunde)」とも表現されている (F. Jöde, 1929, S. 10-11)。

²⁸ F. Jöde, 1927a. S. 58.

²⁹ これらの授業に加えて、1929年の資料には高学年の子どもたちが「音楽する」なかで音楽史を週一度学ぶ様子が描かれている (F. Jöde, 1929, S. 8)。

- ³⁰ 音楽授業に関しては上述の注 11 に示した①～③の資料の他に、イエーデが青少年音楽学校における自らの実践から音楽の基礎教育についての内容を理論化したものがある (F. Jöde, *Elementarlehre der Musik, Gegeben als Anweisung im Notensingen, I. Teil*. Georg Kallmeyer Verlag/Wolfenbüttel, 1927b.)。したがってこの理論も音楽授業の内容と捉えることができる。本稿ではこの前提のもとに論考する。
- ³¹ F. Jöde, 1924. S. 44.
- ³² 音階を構成する各音をそれぞれ異なった音節であらわすこと。
- ³³ イェーデの基礎教育については、小山英恵「フリッツ・イェーデの音楽基礎教育——イェーデの音楽観『オルガニク』を検討の基盤として」『音楽教育学』第 41 巻第 1 号、2011 年、pp. 24-35、において明らかにされている。そのためここでは、音楽授業の全体的な指導方針に焦点を当てる。
- ³⁴ F. Jöde, 1927b. S. 138.
- ³⁵ ebd.
- ³⁶ またイェーデは 1929 年時点において教師用の指導書として、『音楽において創造する子ども』(F. Jöde, *Das schaffende Kind in der Musik*. Wolfenbüttel : Kallmeyer, 1928.) を挙げている (F. Jöde, 1929.)。この内容については、小山英恵「フリッツ・イェーデの音楽における『創造』のための教育」『教育方法学研究』第 36 巻、2011 年、pp. 61-72 に詳しい。
- ³⁷ F. Jöde, 1929. S. 14.
- ³⁸ a. a. O., S. 15.
- ³⁹ F. Jöde, 1924. S. 54. ただしロマン派の音楽はイェーデの課題にそぐわないとし取り扱わなかった。
- ⁴⁰ F. Jöde (Hg.) *Musikant Lieder für die Schule*. Wolfenbüttel : Kallmeyer. 1925.
- ⁴¹ その他イェーデは、この学校の生徒用教材として以下を挙げている (F. Jöde, 1929.)。幼児には、F. Jöde, *Ringel Rangel Rosen, I. Teil: Spiellieder*. Wolfenbüttel: G. Kallmeyer. 1928 等、器楽授業のためにはピアノ曲集、W. Woehl, *Klavierbuch für den Anfang*. Wolfenbüttel: G. Kallmeyer. 1927 や W. Woehl, *Das Bachbuch für Klavierspieler*. Wolfenbüttel: Möselers. 1927、その他 H. Purcell, *Spielmusik für kleines Streichorchester. Eingerichtet von H. Höckner*. Wolfenbüttel: Möselers. 1926、また W. A. Mozart, 12 Duette für 2 Melodienstr., G. P. Telemann, Sechs Duette für zwei Flöten oder zwei Geigen (R. Budde (Hg.)), P. Hindemith, Schulwerke für Instrumental-Zusammenspiel. op. 44 といった作品である。
- ⁴² F. Jöde, 1929. S. 10.
- ⁴³ ebd.
- ⁴⁴ a. a. O., S. 11.
- ⁴⁵ F. Jöde, 1927a. S. 66.
- ⁴⁶ ebd.
- ⁴⁷ F. Jöde, 1929. S. 19.
- ⁴⁸ a. a. O., S. 5.
- ⁴⁹ F. Jöde, 1927a. S. 63.
- ⁵⁰ F. Jöde, *Der Kanon ein Singbuch für alle*, 3 Teil. Wolfenbüttel : G. Kallmeyer. 1926.
- ⁵¹ P. Hindemith. *Das Neue Werk. Gemeinschaftsmusik für Jugend und Haus*. P. Hindemith, F. Jöde u. H. Mersmann (Hg.) . No. 1: P. Hindemith: Lieder für Singkreise, Opus 43 II; No. 2: L. Weber: Hymnen I, Wolfenbüttel-Mainz: Kallmeyer/Schott, 1927.
- ⁵² F. Jöde, 1929. ヒンデミットは青少年音楽運動に直接関わりをもっていた作曲家でもある。
- ⁵³ a. a. O., S. 11.
- ⁵⁴ a. a. O., S. 7.
- ⁵⁵ 民族舞踏グループについては、a. a. O., 1929. S. 16. による。
- ⁵⁶ ebd.
- ⁵⁷ 「歌の旅」については、a. a. O., S. 16-17.
- ⁵⁸ 「森の音楽」については、a. a. O., S. 17-18.
- ⁵⁹ a. a. O., S. 18.
- ⁶⁰ 「開かれた歌唱」については、a. a. O., S. 18-19.
- ⁶¹ a. a. O., S. 19.
- ⁶² F. Jöde, 1927a. S. 60.
- ⁶³ a. a. O., S. 61-62.

(日本学術振興会特別研究員 教育方法学講座 博士後期課程 3 回生)
(受稿 2012 年 9 月 3 日、改稿 2012 年 10 月 31 日、受理 2012 年 12 月 27 日)

Plan for a Youth Music School by Fritz Jöde: An Examination of the Charlottenburg Youth Music School Curriculum

KOYAMA Hanae

This paper examines the curriculum for the Charlottenburg Youth Music School in Berlin, which was founded by Fritz Jöde's conception in 1923. Jöde was a music teacher and he is known as the initiator of the German Youth Music Movement. The Charlottenburg Youth Music School aimed to revive everyone's participation in musical activities expressive of a sense of community or "Leben(life)" as inner "lebendig(liveliness)". With this goal in mind, Jöde asserted that the Youth Music School should be affiliated to the Academy for Church and School Music, where future musicians and music teachers were trained, and he gave a chance to children from all strata of society to enroll this school. The school curriculum consisted of two sections-music lessons and extra-lesson activities. With regard to the features of the Charlottenburg Youth Music School curriculum, two stood out in particular. The first was the manner in which all lessons were taught through lively musical activities with the connection between people, like anti-intellectualism education that contrasts theoretical teaching, but is systematic at the same time. The integration of these two dimensions lent originality to the music lessons by Jöde. The second was the fact that the curriculum not only included music lessons, but also extra-lesson activities. Because this school not only aimed to improve musical abilities, but also nurture inwardness such a sense of community or "Leben" as inner "lebendig" though music, Jöde integrated these two components into the curriculums. In addition, though it is close to the extra-subject curriculum, the inwardness was always nurtured through musical activities.